

# 回復 歯科医も協力

## 迫る2025 シビック

4

### 9部 訪問看護師の力

慢性呼吸不全がある横浜市鶴見区の松本孝彦さん(79)は今、訪問看護を受けながら、妻の洋子さん(72)と平穏な暮らしを送る。だが数年前は、こんな生活は想像できなかった。

2012年5月に肺炎を起し入院、意識を失い集中治療室(ICU)に入った。一時は気管切開をし人工呼吸器をつけるほどだった。胃に穴を開けチューブで栄養を入れる「胃ろう」もつけた。

同年11月に退院、在宅で鶴見区医師会第2訪問看護

ステーションの訪問を受け始めた。ケアマネジャーは、看護師でもある同医師在宅部門の栗原美穂子さん(49)が引き受けた。

退院当初は、ベッドにはぼろ寝たきりの状態。栗原さんは、口から食べるための



背中と胸のマッサージを終え、「息が通り、生き返ったあ」と喜ぶ松本孝彦さん。左は訪問看護師の金山昌子さん＝横浜市鶴見区

支援に力を入れようと、区内でネットワークを結ぶ鶴見大学歯学部助教で歯科医の飯田良平さん(42)に、のみ込み機能の評価を依頼した。退院当初は、のみ込みやすい「刻み食」を食べていた。内視鏡で検査した結果、機能は比較的良好だったため、徐々に通常食に近づけても良い、とのことだった。

訪問看護師は、飯田さんの助言を受けながら、誤嚥しにくいような食べ方を指導した。口の周りの筋肉などを鍛える「嚙下体操」も続けた。口から通常食を食べられるようになり、13年10月に胃ろうを抜いた。

「専門家のお墨付きを得られたので、安心してごはんを食べられるようになった。訪問看護師さんが、地域の先生方とうまく連携をとってくれ、本当にありがたい」と孝彦さんはいう。体調も回復し、今は訪問回数を週2回から1回に減

らした。今月10日、訪問看護師の金山昌子さん(48)のケアを見せてもらった。ずっとせきをしていて、つらそうだった。

「今日これから出かけるの？ 無理しないでね」。金山さんは声をかけをしながら、うつぶせになった孝彦さんの左の肩甲骨のあたりを中心に、じっくりマッサージしていく。その間も何度もせきをしながら、ティッシュにたんを吐く。その後仰向けになり、胸を開くようにマッサージした。合わせて30分ほどかけた。孝彦さんは起き上がるど、「あー、久しぶりに息している感じがする。生き返った」と笑顔。せきの回数は激減していた。

今は、都内に外出するまでに回復した。孝彦さんと洋子さんは「まさか胃ろうが外せるようになるとは。訪看さんがいなかったら、ここまで回復しなかったでしょう」と口をそろえる。